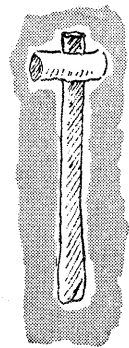


◇講演◇

革新するアメリカの保育

児 玉 省



アメリカでは現在、乳幼児期から始めて児童期までにわたって、大規模な保育を含む教育実験が行われております。評論家や歴史家の中には、これを革命的 (Revolutionary) と呼んでいる人もあります。その規模、構想及び方法において正に革新的であります。それが日本では案外に紹介せられておりません。私は昨年、ロンドンとカナダの学会に出席したあと約一ヵ月間アメリカ政府の案内で、アメリカ各地を回って見てくることができました。本日はこの問題を取り上げてお話ししたいと思います。

I、世紀的教育宣言

一九六五年八月三十一日、ジョンソン大統領が次のような声明を発表しました。それは、「いかなるアメリカの子どもでも、生まれた家柄のゆえに破滅の運命を負わせてはならない」というものです。貧しい家庭とか文化度の低い家庭に生まれたがために、

場合によっては一生が台なしになってしまう、そういう運命にあわせてはいけないのです。

これは、ホワイトハウスのローズガーデンに専門家を集めてなされた演説の中のことですが、まことに注目すべきことばです。ご承知の通り、世界各国において、貧困のゆえに、低階層のゆえに、低文化層のゆえに、子どもが発達の遅れを示していることが明かです。それに対してメスを入れることを宣言したのであって、世紀の歴史的宣言というべきです。

II、ヘッド・スタート、スタートす

その後、この声明をもとに有名な *Head Start* が出発しました。*Head* というのは、馬の鼻面のことです。競馬では、馬が出発する時には鼻面をそろえて一せいに出発しなければならぬ、それを *Head Start* というのです。そういう意味で、恵まれない子ども

もそうでない子どももそうでない子どもと同じように鼻づらをそ
ろえて出発させようというのです。

Head Start は次の二つの哲学に則^{したが}っています。第一は「子ども
は、自分自身の発達を促進し、自分の問題を解決するための、総
合的な計画と施策から利益を得ることができ」第二は「子ども
の家庭と同時に、彼の住んでいる地域社会は共にこの計画に参与
しなければならぬ」ということである。

この哲学に則^{したが}った Head Start は、多次の方法によって行
われるようになりました。たとえば、非常に多種多様な材料と経
験、また準備された場面を利用して子どもの身体と感情性格の発
達を促進しようとするものです。だから学科的に算数も化学も国
語も社会科も、あるいはまた日曜日祭日のお祝いも、戸外、室内
における遊戯も遠足も使う、さらにその子どもによる「性格的
自己の発見」さえも使う、そういう総合的な手段、多次の方法
法を用いようとするものでした。

教師は、子どもに対して、子どもから「教師に要求する」よう
に刺激し指導し、また子どもの要求を許す教師の存在は、子ども
に感情的な暖かい愛情を与えるだけでなく、「子どもをより大
きい世界へ誘導するためにあるのだ」ということを子どもにも知ら
せようとなりました。

では、実際にはどのように行われたのでしょうか。三歳から五
歳までの全国の恵まれない家庭の子どもをとり上げましたが、子
どもの発達の遅れが、子どもの住んでいる家庭の文化度が低い、
経済状態が悪い、ということによるものであれば、それから手
つけなければいけないというのがその考えと手段でした。すなわ
ち、まず家庭の経済的改善を考えなければいけない、たて直しを
図らなければいけないと考えたのです。

だいたい、そういう家庭の親は普通のように働いていないこと
が多い。働いていても、出たらめな生活をしている親が多い。家
庭をのぞいてみると、水道がない、その床下に水が流れている、
ねずみがいっぱいいて子どもの遊び友だちである、そんな状態な
のです。こういう家庭の親に、経済力をつけるということは、
にできることではありません。その子どもたちを教育するには、
どうしたらいいかというのは大変なことでした。

まず考えられたことは、家庭の経済に支柱を与えなければいけ
ない、そうしなければ子どもの教育などできるはずがないとい
うことでした。そこで、とにかく子どもを施設で保育することに
しました。そこでももちろん食べ物を与え、場合によっては衣服も
与えます。そして、親の改善がなくては子どもの改善はありえな
いという考えから、週一回以上親も一緒に来てもらうことにしま

した。先生のもとで親子がそろって学び、生活します。しばらくすると、親は先生の手つたい役 (teacher aid) になってきます。

そこで、子どもの取り扱い方、しつけ方を学んだものを家庭でやらせようというわけです。働いている親は、一週間に一度以上来ることにしてあり、なかにはその施設で仕事を与えられている者もあります。たとえば料理の仕事をする、あるいは雑役をする、あるいは助手をするといった具合で、それによって親の経済力の援助をしながら子どもの世話の仕方を学ばせました。

実際に行つて見たのですが、あるところでは小さな部屋に机があつて、囲りに五、六人の子ども、教師（これは専門家）、それにボランティア（大学生から、家庭の主婦、高校生もいました）、そしてさきほどの teacher aid (家庭の母親が助手をしている) がいるのです。そこで何をしているかというところ、幼稚園か保育所のようなことをしているのですが、大人も子どもも一緒に遊んでいきます。しかし大人の数が大へん多い。質問したところ主任は、こういう子どもは感情的にはげしいし、性格的にゆがんでいたりするので、興奮すると、大人対子どもが一对一でなければうまくいかないことがある。こういう子どもたちの集団生活の助けをするために必要であるといいました。

こういう中で、親はだんだんといろいろなことを覚えてきま

す。子どもの心理を理解し、取り扱いを学んでいくという訳です。また、子どもが先生の世話になっているうちに、一部分の時間をさいて、いろいろなクラスが開かれています。たとえば、料理のクラス、編物のクラス、栄養のクラスというようにです。そういうクラスに参加して、親は家庭生活の技術や職業的技術の一端を学んでいきます。

私は、あちらこちらでそういう親の姿を見ましたが、誰も皆、きちんとした婦人になっているのはびっくりしました。最初に来た時は貧しい家庭の人生の敗残者としての親、女であつたのでしょうが、今ははっきりと立派な婦人になっているのです。なかには立派な料理の専門家になって、施設の食事作りをまかされている人もいました。先生も大いにほめるし、その婦人も自信ができて堂々(?)とふるまっています。また、施設にいる間に勉強して高等学校課程を卒業している婦人はたくさんいます。通信教育ですが大学を出ている人も全国で約百人いました。これを見て、これこそほんとうの総合的対策だろふと思ひました。

III、ヘッド・スタート批判される

Head Start は三歳から五歳児が対象ですので、ここでの二年間を修了すると、子どもたちは小学校または Kinder garden (ア

メリカでは五歳だけへ行きました。すると、そこで評価と批判が始まってきました。ある意味からいうと、知的能力は増進されているし、性格的にも安定してきたし、見かけも非常に立派になってきたわけですが、しかし、その後、小学校へ行っている子どもたちを追評価すると、成績は上がっていないということが言われはじめました。

Westinghouse Learning Corporation という研究機関が、Head Start 卒業の小学生を評価しました。すると、今まで上がっていた能力が、小学校へはいつてから落ちてきた、という結果が出ました。たしかに知的能力は上昇したけれども、それは、特別な保育が続いているだけであって、永續性がない、すなわち効果は上がるけれどもその効果は短命である、ということを示したのです。それで、広く Head Start はだめだ、といわれるむきもでてきました。

それに対して、連邦政府及びその他の新計画推進論者は次のような弁明をしました。それは、受け入れ態勢が悪いのだ、今までやってきた子どもの発達を真に促進させるような方法を取っていないからだ、小学校へ上がったとたんに古い伝統的な教育をおしつけるからだめなのだ、というものです。

政府はヘッドスタートに対する一般の批判に答えて、二つの新

しい教育実験をスタートしました。一つは、ヘッドスタート卒業者のために、五歳から八歳の児童のためのフォロースルー(追跡)計画と、零歳から三歳児のための Parent (and) Child Centre 計画の二つです。フォロースルーがヘッドスタートの批判に対する直接的な答えですが、P・C・Cは、同じ原則に基づく教(保育)実験を下の年齢段階に持っていったものです。以下、P・C・Cから始めてこの新しい実験の話をしめます。

IV、P・C・C計画生まれる

P・C・Cは零歳から三歳の子どもの対象としたもので、Hのと同じ計画を下へもっていったわけです。したがって目的も同じわけですが、特にここでは、「子どもの健康、知的、社会的ならびに感情発達に重点を置く」、「具体的に子どもの生活技術、知的技術を改善し子どもの自信を強化する」、「家庭の組織を強化し、家庭の全員が子どもの教育に参加するようつとめる」などが強調されました。

そのため、P・C・Cでは、子どもが現在持っている医学的、歯科的、また心理的な問題を発見してそれを治療してやる努力が行われました。実際に、あるところでは、医者がひとりひとりの子どもを診療し、歯科医が歯を直したり、薬を与えたり、その他

の指導をしていました。あの、高い料金を取るアメリカの医者、が無料奉仕をしていました。また予防医学的な措置を重視し、定期的に身体検査を行っています。

母親は、ここでもやはり子どもの世話をしながら、いろいろなことを身につけていきます。たとえば、栄養については、バランスのとれた食事を子どもたちのために作る、子どもの寝ている間に栄養に関するクラスに参加する。そこで栄養価についての指示を得るだけでなく、その買いや予算のたて方をも学ぶ、という具合です。また、編物や経済、社会福祉的な活動も教えてもらっています。また専門のソーシャルワーカーがいて、どうすれば福祉的な援助を受けられるか、などの相談を受けてもいました。

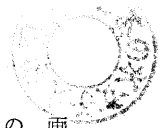
これらの運営はP・A・C (Parent Advisory Council) という親の顧問委員会が行っています。このP・A・Cの構成員の半分以上はその親でなくてはいけないことになっております。日曜や祭日には、家庭全体でピクニックとかキャンプに行き、一緒に楽しんで一緒に生活する、いわゆる家族生活を味わうような指導も行われています。

実際に見て感じたことは、ここでも、母親がちゃんとした母親になっているということです。そしてもう一つ、強く印象に残っていることは、こうした計画を支えている人々の意気込みです。

こういう施設をどこに作るかという点、たいていは、環境の悪いところにある貧しい民家を買って、それを作り直して使っているようです。そこに、所長がひとり、専門家が二、三人、そして子どもたちの親が来て一緒にいろいろな活動をしているわけです。あまりすばらしいので、私は、きかなくてもよかったのですが、その所長に「どのくらいの給与でやっているのか」とたずねました。そうしたら叱られてしまいました。「金でやっているのではない」というのです。それには頭が下がりました。これだけの総合的な教育、福祉施設は運営も総合的に感じましたが、従事職員や母親の態度にも感心しました。

零歳児やその他の乳児の場合には、どうしても個別的に世話をしなければならぬ。そのために、乳児の世話を委託するF・D・C (Family Day Care) を作りました。F・D・Cは乳児の世話をする家庭と婦人を募集したもので、家とか、その一室とか、婦人の人品等を見てから決めて、婦人を一週間か十日間の特別訓練をしています。私がみたあるF・D・Cの家庭では、ひとりの黒人の婦人が四人の乳児の世話をしていましたが、おだやかで静かな婦人で、すばらしい世話をしていました。

D・C・C (Day Care Center) は日本の保育所に当たります。これももちろん従来からもあったのですが、新しい保育計



画実験がスタートしてからは、この計画に関連した保育所は、この計画にかなり似通った性格で運営されているようです。Shome という新語と新しい施設も生まれているようですが、これは school (and) home を一緒にした新語で、学校と家庭を一緒にしたような新しい施設です。

Co-plus Schools (Co-operatively Planned Urban Schools) というのも新しいもので、都市の中に質的な良い教育を与えるために作ったもので、貧しい子どものためというのではなく、質的に良いものを提供しようというものです。

After School これは六歳から十四歳児を対象にしたもので、日本にもあるように、親が勤めていて子どもの帰宅時に家にいない、いわゆる鍵っ子を救うためのシステムです。

V、干渉政策としての実験計画

フォロースループログラムにはいる前に、ここで考えてみたいことがあります。それは、こういう新しい実験計画は一種の強力な干渉政策である、ということですが、従来の中産階級の普通の教育理念は、子どもの発達に自然にまかせておけばよい、知的な展開にし、性格発達にしろ自然に成熟するのを待っていればよい、というものでした。ところが、アメリカの低階層の子どもの

取り上げる場合、そんなことではどうにもならない、ということを見いだして、思いきった総合的な社会福祉施策を含む干渉政策を打ち出したわけです。子ども自身の発達を正常に近づけるためには、親自身の生活の立て直し、家庭経済の支持、親自身のしつけ方の検討と見直し、子ども自身の身体的世話など全部を包含したものを、連邦政府、地方政府、地域社会、地域内の各種の職能的福祉団体、ボランティア奉仕者などを、打って一丸とした組織のもとに展開している干渉政策的実験です。干渉という言葉が強すぎれば、社会福祉的教育実験です。ただ一つ注目すべき特徴は、当の子どもの親と家庭がこの教育実験に参加していること。自分自身がこのプロジェクトの一員として参加し、また、すなわちプロジェクトの運営顧問委員会において、主導的役割を与えられていること、すなわち問題の解決を自分自身の手でゆだねられていることです。この点は従来のこの種の福祉的教育施策とちがっている注目すべきことです。

干渉という言葉のひびきが強いですが、考えてみると、あらゆる教育は干渉だと思えます。家にいる子どもを、一定の年齢になって集めてきて学校に入れるこれが現在のあらゆる国の教育の姿であって、それは程度の差はあれ、一種の干渉的施策であって、ただ従来からずっとあったために気がつかなかったのにすぎ

ません。しかし前述したヘッド・スタート、P・C・C、またフ
ォーロー・スルー等は、もつと強度の特定目的をもつた干涉的施策で
あります。普通の子どもの場合には、幼稚園、保育所、小学校等
において、子どもが教師の指導のもとに共同生活をしているあい
だに、おのずと成長学習してくるのを待てばいいとされてきた自
然主義的、自由主義的教育の方法とは非常にちがっているこの種
の教育施策には、考えるべき幾多の問題があります。

私はこの世紀の実験に強い印象を受けて帰ってきました。この
プロジェクトを推進している人道主義的精神、プロジェクトに関
係している人たちの心意気、またプロジェクト過程に見ちがえる
ように立派になつていようような低階層の婦人たちを見て、感銘を
おぼえました。しかしこのプロジェクトをわが国の保育や教育事
情に結びつけて考える場合、いろいろな問題が浮かんできます。

わが国の子どもにこういう総合的対策をとることなどは考えら
れないにしても、このプロジェクトで使っているテクニークの一
部などは使えるかもしれない、ということが考えられます。しか
しこの問題はまだ検討が行われているわけではありません。たと
えばセサミ・ストリートがいい例です。ああいうテクニークはア
メリカのプロジェクトに登場する子どもたちにはいい方法である
かもしれませんが、あれをそのまま普通の家庭の子ども、または

日本の普通の幼稚園児、保育園児などに適用していかどうかと
いうことは別問題です。その他この強力な干涉的施策的なプロジェ
クトの考え方と方法を、普通の保育に使っていかどうかという
ことは検討を要する問題です。

またプロジェクトには、かなり知的発達と知的改善に重点を置
いているむきがあるようです。これもプロジェクトがソ連のロケ
ット打上げにしげきされて出発したこと、アメリカの低階層の
子どもたちの実状を考える場合、当然かもしれません。そして特
に知的発達を促進するように設定された環境の中で子どもたちの活動
を行わせているのも、うなずけることです。しかし、普通児の場
合は、今まで以上に特別な環境設定が必要なかどうか？ 子ど
もは与えられた環境のなかで、自ら環境を作りかえ、環境作りを
して自己活動と自己経験の中に学習し成長しているものであって、
その趣旨を忘れていたずらに速成的に出来上りすぎた環境を提供
することには問題があると思います。もちろん見てきたものの全
部がそうであったというのではありませんが、そういう心配を感
じさせたものがありました。自由保育的に伸びている子どもに、
プロジェクトの方法を持つてくることには慎重な考慮が必要で
す。セサミ・ストリートのことは既にふれましたが、ああいう機
械的な記憶による学習は、言語の場合、ある意味で有効でしょう

が、あの種の学習に頼っていたのでは人間の頭の働きを機械的にして、抽象的、論理的能力は育ちません。

V、フォロースルー（追跡）実験

フォロースループログラムにはいりません。フォロースルーというのは、先に述べましたようにヘッドスタートからスタートした子どもたちが、その後小学校へ行ってからだめだといれられてしまつて、それを救うために計画されたもので、現在では全国で八万一千人の子どもの対象として実験しています。この計画は、連邦政府がいろいろな大学の教育学部や専門的な教育機関あるいはその他の施設に委託してそれぞれ独自に運営してもらつており、全国的に分布して、各々がった機関がその運営に当たり、三十いくつの実験が進行中ですが、そのうちからここでは六つだけ取りあげてお話をいたします。

今までのヘッドスタートでもP・C・Cでも、子どもの生活指導、学習指導については、いろいろな教育学者、心理学者の理論や意見が取り入れられているようです。たとえば、デューイ、ピアジェ、フロイド、スキナー、ハントなどの違った立場の理論が入っているようです。そしてそれを各施設、各機関ごとに、総合してやっているようです。しかし追跡プロジェクト（フォロ

ースルー）では、実験を委託された機関が大学、大学の研究所、または独自の研究機関であつて、または、そういう機関の指導の下に実験が運営せられています。これらの機関の実験の運営は、一〇〇%、独自の自主運営です。どんな理論にもとづいて、どんな方法を使おうが、すべて自主運営が許されています。したがつて各実験機関は各々独自の理論と方法を持っているわけで、それらの方法を比較すると興味深いものがあります。時間の関係上ここでは次の六つだけを取り上げます。

1、Bank Street College of Education

ニューヨークにある小さいけれども教育学部大学として有名な大学です。この立場を簡単に述べますと、

(一)子どもは自分自身の学習に自律的に参加するのであつて、大人は子どもの世界を拡大し、経験の持つ意味に対して敏感にしてやることによって、その自発性を助成する。

(二)児童は、自分自身について、自己診断的でなければならぬ。

(三)学習環境は子どもの興味や状態の変化と成長に合わせて絶えず再編成しなければいけない。

(四)子どもの興味を、家庭や学校以外のより大きい社会へと拡大してやるように、環境作りを計画的に行う。

(四) 具体的な方法として、教室は広汎な経験を包含し各種の作業を許す各種作業領域に組織する。

ということになりますが、最後の具体的領域作りというのは、どういうのかといえますと、これは日本ではあまり見られないことですが、教室の中がいくつかに区分されているのです。このコーナーは「地域社会」、このコーナーは「友だち」、このコーナーは「家庭」、このコーナーは「遊戯」という具合になっているのです。そしてそれぞれのコーナーには、その領域に関するおもちゃや資料が置かれています。子どもたちは好きなコーナーで活動していて、そこがきると次のコーナーへと行くというわけです。これが組織され、計画され、準備された環境だということです。

たいへんおもしろく思ったことですが、たしかに学習能率は上がるでしょうが、問題はあります。人間の社会はこんなものではないかもしれません。日常、社会にはある領域だけあるのではありません。いろいろな領域が混在しているのです。こういうように興味を分断しておいて、もし子どもがあることだけに集中してしまったりどうするのでしょうか、と思いました。

ここでも両親は、教室活動に参加し、また社会的な地域活動にも参加していました。

2' High Scope Educational Research Foundation (ハイスコ

1' プ教育研究財団)

ここは、カーネギー財団が出資しているところですが、行ってみると、一見工場のような教室がありました。大きくてだだっ広い所を使ってそこにいろいろな教材となるものが置いてあるのです。まん中には、子どもたちが上っていくように中二階が作ってあります。またかなりの機械が置いてありました。のこぎりもなともその上まだ子どもたちには使いこなせないような機械や道具もあります。まるで一見工場の印象です。ここに子どもたちが来て勝手に遊ぶのです。

「これで何を教えるのか」と質問してみました。「もちろん知的活動は教える、知的能力も学んでもらう、その他あらゆる性格的なものも学んでもらう」というのがその答でした。また、算数はどうするのでしょうか。「算数は教養だ」「絵もことばもみんな教えるのだ」「教科書も作ってある」ということです。自分の活動それ自体が経験になって学ぶのだというのです。ここは、かなり知的な能力の開発に力を入れているといわれているところですが技術的なものを多く学ぶでしょうが、情操教育はどうなるんだろうという、日本人の疑わくを持たざるを得ませんでした。

外では、夏休みだというのに先生が汗をいっぱいかいて大きな古材を切っていました。子ども遊ぶところ、同時に勉強すると

ころを作るのだというのです。その熱意にはうたれてしまいました。

この理論をまとめてみますと、

(一)子どもが実際活動に参加することを強調するオープン教育計画 (子どもが自由に活動を選択する)

(二)子どもの発達に対して徹底して組織的計画的な教育方法を用いること。

(三)子どもの発達の段階を絶えず評価し、それによって次の適当な教育計画をたてる。

(四)研究所の教育方法は知的思考型で、子どもの考え方と大人の考え方との違いを絶えず念頭において計画し指導する。

(五)子どもが一生涯使うような思考技術を養うことを中心の課題とする。同時に学科的な能力もこれにつけ加えて与える。

(六)ただし学科的な能力よりも学習の方法や態度を強調し援助することに重点を置く。

(七)学習は必ず経験的活動的でなければいけない。すなわち子どもが環境に働きかけることによって学習は起こる。

3. University of Florida Parent Education Model (両親による教育参加計画)

アメリカ東海岸の南部にあるこの大学では、親が子どもの教育

に直接参加できるようにすることに重点を置いています。親は子どもの感情や知的発達の要であると同時に、子どもを指導し子どもの教育に参加する特別な資格を持っている、という考えから、親を教育することによって家庭に働きかけるのを目標としています。そのためには、学習や作業は家庭と学校で共同してやれるようなものが計画されています。そうして、この計画に参加している親たちは、教師の助手として、またほかの親たちの教育者として訓練されるのです。

4. University of Arizona free choice of activities

ここでは、子どもに自由に活動させることを主として、大人もこれに参加して、集団で教育を行うことを主張としています。子どもは大人をまねて行動し学習するのだという信念に基づいているのです。また、子どものひとりひとは、自分で学習し自分で成長することを欲している、自分の方法で自分のペースで学習する、という活動の自由選択の理論を採用しています。

5. Engelmann-Becker Program (エンゲルマン・ベッカー法)
またはエンゲルマン・ペライター法)

Engelmann-Becker (Bereiter) は、徹底した behaviorist として有名な人たちです。その主張は、「あらゆる子どもは適当な教え方をしさえすれば何でも学習できる」というものです。その適当

な教え方といっているものをあげてみましょう。

(一) 学習は *hard work* であって、ハードワークは必要なものだ。

(二) 子どもは注意深く組織された小学習段階ごとに、学習技能を適当に分割した方法で学習させる。

(三) 教師のなすべきことおよび学習者のなすべきことは特定すべきである。(こういう課題にはこう教えこう答えなければならぬなど)。

(四) 積極的な強化は、学習活動を保証するだけでなく、くり返し行う学習活動を増大するための根本的条件である。

(五) 一斉に回答するような集団的方法は、子どもに学習させるための能率的な方法である。

(六) 子どもはまちがいをすることを許してはいけない。

(七) 正しい答をするために、子どもは自分のなすべきことを理解し、正しい答が何であるかを理解しなければならぬ。したがって教師の基本的役割は子どものまちがいを分析することである。

(八) スピードは子どもの興味を保持するために有用である。

(九) 子どもは大人の見本から学ぶ。

これらが有名な(エンゲルマン・ベッカー(ペライター))方式で、彼はこの方式によってどんなことでも従来考えられてきた年

齢の段階よりも早く教えられると主張しています。これが早教育の本山的主張で徹底的ビヘービアリズムです。

9. Far West Laboratory Program (フア・ウエスト研究所)

計画)

この計画の特色は、子どもに対する態度としてはどの計画に比べても放任であるべきだ、という点にあります。教師は学習方法の計画者であり、その材料の調節者であるが材料は提供しておけ、しかし放っておけ、というのです。

子どもはやっているうちにおのずと学習しその結果からおのずと強化されるので、わざわざ強化する必要はない。また、ある一定の時までにとか一定の順序で学習しなければならないという材料はない。いかにして学習するかということ強調すればよい、といっています。したがって理想的な学習環境は学習者の側における自由探究ならびに自由活动にある。また、教師のすべきことは子どもの要求に応え、その必要に応ずることであるといっています。

これで各大学教育学部、研究室、研究所などのフォローアップ追跡実験の原理と方法についての叙述を終わりますが、もっといろいろちがった類型をあげることができなかったこと、また取り上げたものでも、もっと詳しく述べられなかったことが残念で

す。しかし取り上げたものだけでもいかに実験が多種多様であるかがおわかりでしょう。したがって追跡実験を簡単に評価し批評することはできません。各々個々別々の考えと方法を用いて実験をしているからです。だがこれらの実験はPCCやヘッド・スタートの場合とちがって、個々の実験がはっきりした理論の裏づけの上に行われていることは興味があります。いずれにしても、実験はスタート以来二、三年を経過しました。これらの実験がどういう結果をもたらしたかは知りたくいところですが、いくつかの評価方法が用いられて、結果の研究が行われておりますが、ここでは私の眼に止まった最も印象的な評価の結果を紹介いたします。

VI、追跡実験の評価

前述したように、追跡実験はいろいろの角度から、いろいろの方法で評価が試みられました。まだ未定のことも多いですが、結果のなから、一、二の注目すべきものを抜いてお話ししたいと思います。

一、この年齢において、複雑な思考技術を多く与えようとした場合は、うまくいっていないようであります。このことはピアジェの発達理論から言って、この年齢の子どもがいわゆる前操作期にあることから、抽象的操作を期待できないという立場と

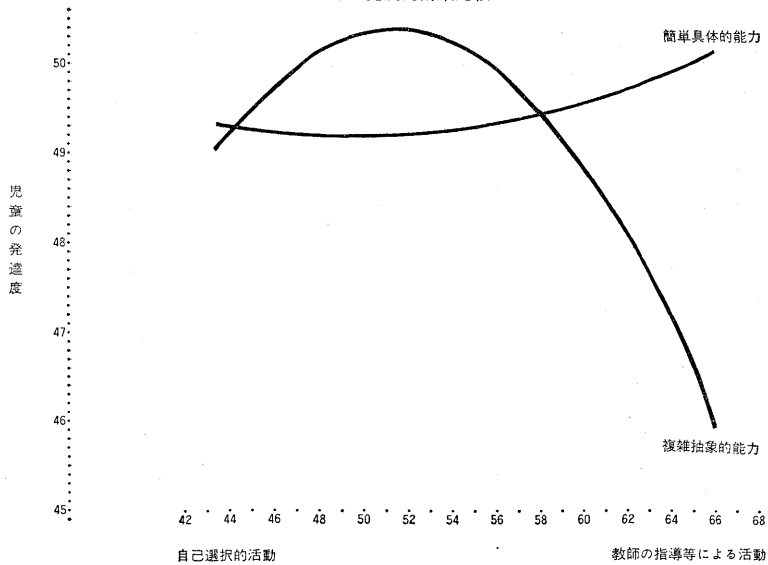
一致するものです。ただし、実験の対象児はすべて欠損的条件のものであったことから、このことが、欠損家庭以外の児童に当てはまるかどうかはまだ決められないでしょう。すなわち実験結果は児童の発達段階を示すものか、または欠損児の発達段階を示すものかは、まだ決定できないということです。データの示すところは、これらの児童は行動を言語に結びつける簡単な作業、またはその逆の作業から利益を得ることが多いということです。これはほかのデータからも確かめられています。年齢相応以上の高度の思考作業は利益をもたらしていません。

二、学習について児童の活動にどの程度の自由、自発性を与えるのが、学習上より効果的であるかという問題はソアー(Soar)夫妻によって、いわゆる正常児(?)の三年生から六年生までを通じて検討されましたが、その研究によると、児童の活動の自由度とこの学習能率は、学習作業の複雑さと抽象度に関連があることが示されました。大きっぱに言えば、より大きい自由度がより大きい児童の発達をもたらしたという結論を示す研究が見られます。もったこまかにいうと、

「取り上げた対象に関する限りでは、適当に高度(中度)の自由度が、児童の複雑な発達をもたらすためには、最も効果的である。同時に簡単な学習は、教師の指導によって増進せられ

児童の自由活動対教師の指導による活動

—その発展的効果比較—



るが、それは、複雑な抽象的発達を犠牲にすることであることを、示すようである」

こういう結論はソアーの正常児の実験資料を欠損児の場合にあてはめて考察しても同じ傾向がみられました。この結果をグラフにしたものの一つが上のグラフです。

数字については説明いたしません、横軸は、左端が児童による自分の活動の自由選択度、左にいくほど、その程度の高いと、また右端は教師によって指導された活動の程度、右に寄るほどその指導度の高いことを示します。その線の一つは児童の簡単な具体的（作業）能力を示し、も一つの線は複雑抽象的（作業）能力を示します。縦軸はそれらの能力における児童の発達度を示します。

このグラフによって見ると、

(1) 教師によって指導された活動が多いほど複雑抽象的能力の発達は落ちていきます。

(2) 複雑抽象的能力を生み出す最上の条件は、自由度と指導的活動のバランスがとれた状態にあります。

(3) 簡単な具体的（作業）能力については、教師によって指導された活動が増加するにつれて増加しているようです。

(4) グラフをここに示すことをしませんが、右端に訓練度（ドリ

ルをとり、左に児童の創意性度をもって作製されているグラフがあります。このグラフの傾向が、ここに示したグラフと全く同一の傾向を示しています。

このことから、適当以上に訓練を加えるとか、児童が教師の指導の活動を行うことは、複雑抽象的能力の発達に有害であることが示されているとも言えます。適量以上の「教師の指導、教師のコントロール、ならびに狭い学科学科目焦点の指導」は、複雑な抽象の発達にとって有害であるということです。

(5)これと逆に、複雑抽象的能力の最善の発達のためには、児童の自由度、創意度、自己指導にも限度があることが示されているようです。

右に述べたことが、ソアー夫妻による評価の一端であるが、この評価は現在の教育にとって極めて重大な意味を持つものであります。

Ⅶ、結 び

話を終えるに当たって総括的な考察を加えて結びにします。

(1)、アメリカで現に行われている保育・教育実験は、まことに画期的なもので、低階層の子どもを救うためには、ああいう方法が最善のものではないかと考えます。家ぐるみ、親ぐるみ、地域

ぐるみに、子どもの全面的発達を求めようとする干渉的な指導が望ましいもののように思えます。ことに関連従事者の意気ごみに、深い感銘を受けました。

(2)、この方法をそのまま、いわゆる正常児に適用することはもちろん問題がありませんが、その部分的使用を考えることはできるかもしれません。ただし対象その他環境的条件がちがうことを念頭において、検討することが必要でしょう。

(3)、追跡実験は対象が幼児ではないが、ヘッドスタート後の児童がどうなっていくかは、今後注目して見守るべき課題であります。

追跡実験の結果はまことに興味深いものがあります。現在ビヒービリズムに準拠した学習指導法が内外でかなり盛んに行われているのを見ると、ソアーの評価に関する研究結果は、高く評価さるべきであって、現在日本においてもしきりに行われている幼稚園児、保育園児の文字や数の指導など、とくと反省すべき問題があります。セサミストリートについても、ああいう教育方法の持つ欠陥を知っておく必要があります。

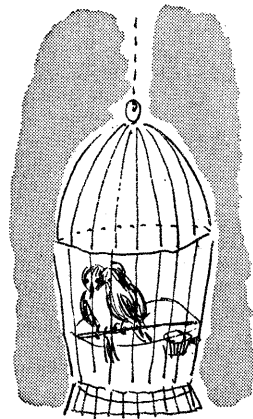
(4)、ヘッド・スタートにしろ、P・C・Cにしろ、その施策が対象児童の知的発達、情緒的発達、身体的発達、性格的発達、健康のすべてにわたって改善することを考えたもので、また施策自体

も家ぐるみ、地域ぐるみのものであることは、繰り返し述べましたが、実験結果の評価の段になると、もっぱら知的角度だけが主として、浮かび上がっているようです。欠損児童の場合、これさえおさえれば、あとは同時に改善されているということかもしれない。しかし、実験結果を正常児にあてはめて考える場合、知的発達だけを考えればいいというわけにはいきません。追跡実験の場合には、とくに、知的評価だけが著るしく眼につきます。問題を自分のものとして考える場合には、この点とくに注意を要することと思います。

(5)、追跡実験の形態のパターンは、ごらんになったように、多種多様で、考え方において正に正反対のものさえありますが、この多様性を許しているところに、アメリカ的な考えの特徴があつて、今後この実験から生まれてくる結果を見守りたいと思えます。このぼう大な実験の中から、新しい教育思想が生まれてくるかもしれないと思います。

(6)、アメリカの人工衛星の打ち上げは、そのための必要として無数の新しい科学技術を生んで、それは現にあらゆる分野で使用されております。ヘッド・スタートに始まったアメリカの巨大な教育実験も、また多くの新しい副産物をもたらすにちがひありません。刮目してその成果を期待したいと思っております。

○ これは、お茶の水女子大学での集中講義を、学生さんが筆記してくれたものに、かなり加筆しました。また、このアメリカの視察は、玉川学園大学の藤田復生教授と同行しました。



お知らせ

さきにお知らせしました「みどり会夏季研修会」に、お茶の水幼稚園々長 勝部真長先生もご参加、講演をしてくださるようになりました。ご多忙の中、お繰り合わせくださいましたのでお知らせがおくれました。どうぞご期待くださいませ。